

全国厚板シヤリング工業組合

切板の需要動向

(H25.9.18)

1. 切断量の推移

(成品切板出荷+賃加工)

(単位:千ト)

| 項目 | 24年度 | | | 25年度 | | |
|-----|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|
| | 2Q | 3Q | 4Q | 1Q | 2Q | 3Q |
| | (実績) | (実績) | (実績) | (実績) | (事務局想定) | (事務局想定) |
| 無規格 | 51 (3) | 54 (3) | 60 (3) | 61 (2) | 60 (2) | 60 (2) |
| 規格 | 399 (77) | 378 (70) | 345 (69) | 371 (60) | 410 (63) | 430 (63) |
| 合計 | 450 (80) | 432 (73) | 405 (72) | 432 (62) | 470 (65) | 490 (65) |

(出所)・実績は全国厚板シヤリング工業組合「鋼板流通調査」結果による。

・カッコ内の数値は賃加工量で内数。

【コメント】

■ 25年度1Qの切断量(実績)は、432千トとなった。

過去最低値の前期に比べると6.7%増加したが、前年同期(497千ト)比では13.1%減と大きく下回っている。

■ 2Q(想定)は、470千ト程度(前期比+8.8%、前年比+4.4%)と想定。

・7月152千ト(前月比+4.8%) + 8月(速報)146千ト(同▲4.4%) + 9月(想定)170千ト(同+16.4%) ≒470千ト

・21年度2Q:406千ト、前期比▲6.7%、22年度2Q:531千ト、同+7.5%、23年度2Q:528千ト、同+8.2%
24年度2Q:450千ト、同▲9.5%■ 3Q(想定)は、490千ト程度(前期比+4.3%、前年比+13.4%)と想定。

・建設関連需要:前期比+10%、建産機関連需要:同+10%、その他:横ばいと想定。

・24年度の期平均446千ト、月平均:149千ト。⇒25年度3Q月平均:163千ト

・21年度3Q:468千ト、前期比+15.4%、22年度3Q:542千ト、同+2.2%、
23年度3Q:512千ト、同▲3.0%、24年度3Q:432千ト、同▲4.1%

(参考) 切断量(成品切板出荷+賃加工)の前年同期比の推移

20年度1Q:+6.3%、2Q:+6.6%、3Q:▲3.3%、4Q:▲24.8%

21年度1Q:▲34.1%、2Q:▲37.9%、3Q:▲25.0%、4Q:▲4.0%

22年度1Q:+13.5%、2Q:+26.3%、3Q:+15.8%、4Q:+10.1%

23年度1Q:▲1.1%、2Q:▲0.5%、3Q:▲5.6%、4Q:+1.4%

24年度1Q:+1.7%、2Q:▲14.7%、3Q:▲16.8%、4Q:▲22.4%

25年度1Q:▲13.1% 2Q(推):+4.4% 3Q(推):+13.4%

2. 業況

厚板シャア業界を取り巻く状況を概観すると、足元の需要環境は、前回報告時点（6月）に比べると、切板需要の約8割を占める建設および建産機関連需要に牽引されて、一部にまだら模様を残しつつ、全体としては予想を上回る速さで回復しており、先行きへの期待とともに様変わりの様相を呈しつつある。

すなわち、建産機部門は、外需の不振を内需が補う形で堅調を持続している。長期低迷が続く鉱山機械を除き、主要機種は排ガス規制や消費税導入前の駆け込み需要等の特殊要因が寄与しているものの、堅調な分野・機種が徐々に広がっている。しかし生産拠点の海外シフト問題や駆け込み需要一巡後の反動減など多くの懸念材料を抱えており、先行きの不透明感は依然残されている。

一方、建設関連分野は、鉄骨建築は、全国的な物流倉庫・店舗の建設に加え、首都圏や名古屋地区を中心とした大型建築案件の着工が本格化しつつあり、各地区のファブは向こう半年以上の受注残を確保し高操業を続けている。一方、橋梁は昨年度以上の入札量が見込まれるが、これまでのところ出件が遅れ気味で、足踏み状態が続く。

今後の見通しについては、①建産機部門は、受注面で機種間の濃淡はあるものの、駆け込み需要や震災復興需要の継続、円安を追い風にした輸出増、堅調な設備投資動向等を勘案すると、全体としては当面底堅く推移するとみられること、②建築・橋梁分野についても、大型再開発案件の着工が秋口以降さらに本格化すること、橋梁は、昨年度案件の製作や大型補正予算等の執行継続が見込まれることから、徐々に回復するとみられる。

これに伴い、シャア加工量も、2Qは5期ぶりに前年比プラスに転じ、3Qはさらにそれを上回るレベルまで回復すると予想される。

ちなみに、当組合が実施している月次統計「鋼板流通調査」で、「切板需給」の推移をみると、昨年度2Q以降出荷減が止まらず、出荷見合いの受け入れ減で、需給は1Qまで縮小の一途を辿ってきた。この間在庫率も200%超えの高水準が続いた。しかし、7月に入り出荷が14か月ぶりに前年比プラスに転じたほか、在庫率も192%まで低下するなど、ようやく回復を示す数字が出てきている。

なお、8月（速報）統計では、仕入れ量173千ト（4ヵ月ぶりの前月比減）、出荷量173千ト（5ヵ月ぶりの前月比減）と同量になり、在庫量は349千トと前月比横ばいにとどまった結果、在庫率は202%と前月比10ポイント上昇した。

8月は季節要因により需給が若干緩んだが、今後は、需要（出荷）上伸が見込まれることから、切板需給の更なる均衡拡大が期待される。

また、全国のシャア各社からの情勢報告を整理すると概要以下の通り。（9/6市場委員会）
【北海道】鉄骨は、昨年からの継続大型3物件（札幌三井JPビル、北海道新幹線函館車両基地、札幌競馬場）に加え、新幹線新函館・木古内両駅舎などの着工が本格化し、ファブの大半は、年内の山積みを含め、順調な操業が見込まれている。25年度の最終的な鉄骨需要量は前年度実績を大幅に上回ると期待される。

一方橋梁は、25年度は大幅増が予想されているが、今のところ設計済み案件が少なく、入札や積算の人手不足から発注が大幅に遅れている。

シャ-各社は、こうしたファブの高稼働に支えられて、秋口から年末に向け高操業の維持が可能となっている。

【東北】沿岸部の震災復旧・整備事業は、依然土木主流で進んでいるが、防潮堤および水門建設も本格化してきた。また災害公営住宅建設も進んでいる（宮城県 15000 戸、岩手県 6000 戸、福島県 3700 戸を計画）。ファブの稼働状況は、H グレードで今年度末、M グレードで年末から年明けまで確保。ただ切板は単重が小さく枚数ばかりが多く、稼働率は高いが、生産量が上がり、数字に結びついていない。

【関東】橋梁・鉄骨とも足元徐々に回復しており、シャ-加工量も増加基調で推移している。しかしレベル的には低位にとどまり、期待値を下回っている。今後はファブ稼働が順次上向くと予想されることから、シャ-加工量も期を追って増加すると見込まれる。

一方、建産機関連は、緩やかではあるが受注増の分野が広がっている。しかし鉱山機械の低迷や一部機種の変動減が今後予想されるなど、懸念材料を抱えている。

【新潟】4～7月の鉄骨量は前年同期比10%増のペースで推移している。土木も徐々に動き出しており、環境は大きく改善している。ファブはH グレードが5～6か月、M グレードが3～4か月の受注残を抱え、順調に稼働している。製造業分野も少しずつ回復の兆しが見えてきた。しかし母材値上げのユーザー転嫁は思うように進んでいない状況。

【東海】地元ファブ（H および M グレード）の仕事量は、概ね年度末まで一杯のところが多い。建築関連需要は、秋口から来年夏場にかけて大型建築案件や物流倉庫、大型量販店を中心にさらなる増加が見込まれ、シャ-加工量も今後確保できそうである。こうした中、母材需給のタイト化、鉄骨価格の上伸傾向、ファブの加工能力低下による供給ネックへの懸念など、シャ-の収益確保につながる環境が整いつつある。

建産機関連も、復興需要や消費税引き上げ前の駆け込み需要等を背景に総じて好調を維持しており、秋以降のシャ-切断量の増加が期待される。

【大阪】足元の需要は力強さを欠いているが、若干改善傾向にある。橋梁の入札は順調に実施され、年間発注量が30万トン超レベルで推移している。ただし、受注するファブは一部大手に偏りが見られ、専業ファブはまだ工程を埋められない状況が続いている。

鉄骨は、今後の大型案件が少なく、建築向け需要は期待できない。建産機は堅調に推移。

【九州】6～7月ごろから動き出した建築案件は、いよいよ佳境に入っており、建材系シャ-の稼働はほぼ100%で、年度内まで高稼働が続く見込み。ファブも繁忙期を迎え、仕事を断るケースも出ている。鉄骨単価は上がっているが、同時に材料費やとび職人の費用

も上がっていることから、採算的には十分とは言えない状況。建機は、25年上期は排ガス規制の駆け込みによる生産が増加したが、下期は調整局面に入る模様。造船は、船価が上がらない状況が続いているが、商談・受注情報が多くなってきており、船台期間を着実に伸ばしている。

次に、需要動向を概観すると、

- (1) 建設機械は、堅調な国内向けが、外需の不振をカバーし、トータルでは12か月連続で前年水準を下回って推移しているものの、その減少幅は月を追って縮小(7月は▲0.9%)しており、ようやく底を打った感がある。機種別にみると、①主力の油圧ショベルは、国内向けが排ガス規制・消費税導入前の駆け込みと復興需要の本格化等を背景に、大幅増を示しており、足元では20トンクラス機種のフル生産が続き、下期以降は10トンクラスの増産が見込まれ、引き続き高水準の生産が維持されそうである。②建設用クレーンも、復興需要や公共工事の増加期待に加え、増税前の駆け込み、中古機械価格の上昇、円高修正による輸出増等により、堅調を持続している。③ダンプ・トレーラーは、10トンクラスのダンプは、各メーカーともフル操業が続き、北米向け30~40トンダンプの生産も急回復している。重機積載用トレーラーも絶好調で、これから暫く続きそうである。④重電関係は、火力発電関連が内外需ともに堅調に推移し、具体的案件の引合いも目白押し状態である。⑤鉱山機械は、依然不振を余儀なくされている。資源メジャーによる鉱山開発の減少・延期から、販売の低迷が続き、メーカーの生産調整は長期化の様相を呈している。
- (2) 建設分野については、まず橋梁は、25年度入札量は、25万トン程度が見込まれ、昨年度(23万トン)規模を上回る見通しである。また国交省案件が増加する見込みであり(24年度:66千トン、25年度予想:129千トン)、ファブの鋼材使用量は増加する予定である。しかし足元の切板加工量は、最悪期(4Q)を脱し、緩やかな増加傾向を辿っているものの、レベルとしては依然低位のまま、足踏み状態が続いている。先行きに対しても不透明感が残る。

一方、建築鉄骨は、各地とも小型案件(病院、物流倉庫、店舗等)の鉄骨需要は旺盛で、Hグレード以下の中小ファブ稼働の繁忙が続いている。(形鋼やコラムの伸びが大きく、切板加工にはあまり繋がらない。)一方、首都圏・名古屋・北海道地区をはじめとする大型再開発案件の着工を背景に、関連ファブの山積み、加工量ともに漸次増加するとみられる。

今後さらに工事が本格化するにつれ、下期中にはファブ各社ともフル操業へ移行し、その先1年程度は高操業を維持すると見込まれる。シャー加工量も今後着実に増加するとみられるが、本格的回復は、着工のズレ込み等を勘案すると、本年度4Q以降になると予想される。
- (3) 一般店売り分野については、主要分野である中小建築案件のほか、建産機分野等からの受注も出始めており、長期低迷を脱し、6~7月頃からようやく好転の兆しが窺えるようになった。各地区とも小ロット・短納期の商いが中心で、依然採算面の改善には至って

いないが、今後、他分野からの引き合い増や操業度の向上等が期待できる状況になりつつある。

次に、母材供給面については、国内のメーカー・ロールは、輸出量の安定確保に加え、造船、建築土木、建機向けを中心とする内需増により、一段とタイトな度合いを増しているようである。また、ミル各社は、内外需の増勢が続く中、相次ぐ設備の炉修やシフトダウンを計画していると伝えられる。

こうした状況下、各ミルは、年初より店売り向けを皮切りに、厚板価格の段階的値上げを発表している。今後とも、紐付き価格の進捗を含め、メーカーの価格対策から目が離せない状況にある。シャー業界としては、母材値上げ分のユーザー転嫁を最優先課題に位置付け、目下それに取り組んでいる最中である。転嫁浸透には今後かなりの時間を要しそうである。価格転嫁の実現に向け、厚板需給の改善と、メーカーの販価是正スタンスの堅持が不可欠であり、引き続き母材メーカーサイドの強力なサポートを切にお願いしたい。

なお、シャー業界が抱える直近の課題は、以下の通りである。

- ①母材価格引き上げに伴う価格転嫁問題
- ②建設分野を中心とする需給ギャップ問題
- ③適正加工賃の確保
- ④与信管理、雇用対策(雇用助成金の申請、セーフティネット保証制度申請等)
- ⑤コンプライアンス対応(品質証明ガイドラインの普及促進、独禁法遵守、輸送条件問題、等)
- ⑥製造業の国内空洞化
- ⑦電力料金等コストアップ問題

3. 足元の主要需要部門の動き

(1) 橋梁・建築鉄骨の動向

【全 体】

足元の建材分野の活動は、橋梁・鉄骨両分野とも徐々に回復しており、シャー加工も増加基調にある。しかしながら、橋梁向けの絶対値レベルは未だ低位であり、鉄骨向けも期待していたレベルを下回っている状態。

今後の橋梁・鉄骨分野のファブ稼働は、橋梁については不透明感があるものの、鉄骨は大型再開発案件の着工を背景に、今後増加基調をたどるとみられる。シャー加工量も同様に増加に向かうと予想される。橋梁ファブの落札の足踏みや、鉄骨ファブのピーク時期の差があることから、本格回復は4/四期以降となる見込み。

【橋 梁】

昨年度後半の落札案件の加工開始に伴い、一部橋梁ファブの加工量は増加し、シャー加工量も徐々に回復しているが、絶対値レベルとしては未だ低位にとどまっている。

全国の橋梁入札は、昨年を上回る見通しであるとともに、国交省案件が増加(H24FY：66千ト→H25FY 予想：129千ト)する見込みであることから、橋梁ファブの鋼材使用量は、今後増加する予定。

【鉄 骨】

首都圏等の大型再開発案件が着工され、Sグレードファブの加工量は、徐々に増加している状況。今後更に加工量が増加することを鑑み、工程の前倒しを検討するファブもあったが、能力が追いつかず、自然体に戻すケースもある。

従って、シャー加工量は、同様に増加基調にあるが、切板明細のズレなどもあり、期待したほどのレベルにない。

今後、首都圏等の大型再開発案件は、着工が一段と進むことから、Sグレードファブの山積みも今後更に増加し、下期中には、各社ともフル操業へ移行し、その後1年程度は高位の操業レベルを維持する見込み。シャー加工量も今後逐次増加するが、各ファブ毎にピーク時期が異なることから、本格的回復は4/四期以降となる見込み。

(2)建産機・重電・金属工作機械の動向

【全体】

現下の状況は、前回報告時(6月)に比較して緩やかではあるが、全体感としては好転していると言える。特に店売り分野の変化が象徴しているように、幅広い分野で受注が漸増している。反面、鉱山機械における低迷長期化の懸念や、油圧ショベルでは一時的増産の反動減も今後予想されており、全分野での回復までには至っていないのが現状である。

【建設機械】

建機工業会の統計によれば、7月の出荷額は前年比12ヶ月連続でのマイナスであるが、内需が機種全般に亘って堅調で外需のマイナスをカバーしている。前年比での落ち込み幅も減少(△0.9%)傾向であり、底を打ちつつあるように思われる。

・油圧ショベル

排ガス規制・消費税増税前の駆け込み需要等の要因から国内向けは非常に堅調(+44.4%)。足元は20トクラスの機械のフル生産が続き、下期からは10トクラスに移行する事で小型化による加工重量減は避けられないが、引き続き高い生産レベルは維持できそうである。「外需の軟調さを内需の堅調ぶりで補う格好だ」(建機工業会)。

・ミニショベル

住宅需要の増加による影響から国内向けが堅調であり(+17.8%)、輸出も北米向けを中心にプラスに転じた結果、関係シャーの加工量も+20%前後となっている模様。

・建設用クレーン

ラフテレンクレーンは、内外需共に好調さを持続している。国内向けは増税前の駆け込み、中古機械価格の上昇、公共事業を始めとする建設工事の増加期待等々の要因から、また輸出は円高修正の影響で引合いが急増している。足元の生産はリーマン前の約+15%程度であるが、今後も更なる増産計画となっており当面堅調に推移する見通しである。

クレーンは、リーマン以降昨年まで低迷が続いた機種だけに、ユーザーの生産計画には

慎重さが見られていたが、夏前頃からは上方修正されるケースが多くなっている。国内向けの成約も確実に増加しており、輸出関連では5～10台の大口成約も見られる。

【鋳山機械】

資源産出国の需要激減により極端な不振となっている分野である。それまでの生産があまりにも高水準であった反動で、加工量の減少度合いも激しく、関係シャーは対応に苦慮している。回復の見込みも不透明で、暫くは低迷が続きそうである。

【重 電】

足元は継続案件の加工も一段落しつつあり、加工量は低位での推移となっている模様。しかしながら、重電メーカーでは火力発電関連が内外ともに堅調で、受注済あるいは応札中の具体的案件が目白押しとなっているようである。競争入札への移行や、部材の海外調達、メーカーの火力発電分野での事業統合等々の要因から、受注までの障害は多いものの、これらの案件が今後シャーの受注増に結び付くことを期待したいものである。

昇降機のエレベータ向けの加工量は、これまで前年比で10%程度落ち込んでいたが、足元ではほぼ昨年並みまで回復しているようである。当初は建築関連が本格的に動き出した後の26年度からの受注増を見込んでいたが、それよりも早い増産となっており、うれしい誤算と言えよう。

【板金・鍛圧機械】

板金系のパンチング・レーザの7月受注は増加。これは「先端ものづくり補助金の効果と思われる」（鍛圧機械工業会）。この結果、国内向けは7ヶ月振りにプラスに転じており、今後の加工量増加に反映されることを期待したい。足元の状況は、北米向けのレーザが好調であることや、一部機種の子中国への生産移管延期が稼働率アップに繋がっている要因ともなっており、まずまずの操業レベルを維持できている模様。

プレス系においては、大型プレスの受注は堅調であるが、中小型プレスの落ち込みにより残念ながら全体では△14.1%。受注状況は前回報告時（6月）より、汎用機や小型プレスがやや回復基調にあるようで、低迷期は脱したものと期待したい。

【フォークリフト】

6月以降3ヵ月程の期間で加工量が増加したが、年度を通してみるとほぼ前年並みか微増といった稼働レベルである。全国的にまだまだ投資意欲が低く、当面低位安定の状況が続きそうである。

【ダンプ・トレー】

10トクラスのダンプは各メーカーともフル操業が続く。排ガス規制前の駆け込みと被災地向けの需要から長期に亘り堅調さを持続している。また重機積載用トレーラーも絶好調で、この部門における加工量は暫く確保できそうである。また北米向けの30ト・40トダンプの生産が急回復しているが、これは北米の排ガス規制前の作りだめが主因だけに、先行きの反動減は避けられないとみられる。

【産機/店売り】

長期に亘る低迷から、漸く受注状況に変化が見られるようになった。

6月から前月比で大幅に受注が増えたシャーもあれば、8月頃から微増状態といった具

合にバラツキはあるものの、今後は堅調分野からの波及効果も期待できる環境になりつつあり、末端実需の分野にも光が差してきたように思われる。価格的にも安値は解消され始めているだけに、収益重視の気持ちを強く持ちたいものである。

【参考】 成品切板の最終用途比率（平成23年3月出荷分。厚板シャー工組調べ）

| | | |
|----------------------|-----|-------|
| ・ 建 築 用 : | 34% | (37%) |
| ・ 土 木 用 (橋梁、鉄塔等) : | 14% | (17%) |
| ・ 建産機用 : | 30% | (26%) |
| ・ 輸送機用 (船舶、自動車) : | 8% | (8%) |
| ・ 重電用 : | 2% | (2%) |
| ・ その他 (鉄道車両、容器、二次製品) | 12% | (10%) |

(注) カッコ内の数字は、21年3月時点の最終用途比率。

全国厚板シェアリング工業組合

シャー業の厚中板在庫推移

(H25.9.18)

組合員の厚中板在庫推移(155社・6事業所／自社所有分)

(単位:千トン)

| 項目 | 24/9末 | 12月末 | 25/3末 | 6月末 | 9月末 | 12月末 |
|-------|-------|-------|-------|-------|---------|---------|
| | (実績) | (実績) | (実績) | (実績) | (事務局想定) | (事務局想定) |
| 在庫量 | 348 | 338 | 325 | 347 | 340 | 330 |
| 前期比/量 | 5 | ▲10 | ▲13 | 22 | ▲7 | ▲10 |
| 在庫率 | 217.8 | 222.2 | 202.8 | 202.4 | 188.8 | 183.3 |

【コメント】

- 在庫量は、昨年6月末の343千トンをボトムに、建産機需要の急激な落ち込みにより、7月末以降増加を辿った。このため8月以降仕入れ調整場面が続き、この結果、今年3月末(325千トン)までは概ね減少傾向で推移した。その後は、4月末は341千トン、5月末350千トン、6月末347千トン、7月末349千トン、8月末(速報)349千トンと350万トン前後で一進一退が続いている。
- 一方、在庫率は(※適正在庫率は150%~200%以下)、昨年8月から今年6月まで一貫して、200%を超えて推移した。特に12月~1月末は出荷の大幅な落ち込みにより、220~230%まで急上昇した。5月~6月末は202%台で推移し、7月末は191.8%と、約1年ぶりに200%を下回った。8月末(速報)は201.7%。
- 今後、シャー各社が必要に見合った慎重な仕入れ姿勢を堅持すれば、在庫数量は、9月末340千トン、12月末330千トン程度まで調整されるとみられる。
- また在庫率は、仮に月間出荷量を18万トン前後で推移すると想定した場合(4~8月の月平均は172千トン)、9月末は189%、12月末は183%程度まで低下すると推定される。
- 今後、需要は、建設および建産機関連を中心に、着実な上伸が見込まれ、特に年度下期以降の切板需要の本格的な回復が期待される。こうした中、シャー各社は、足元の需給動向には充分留意する必要があり、適正な仕入れ及び在庫管理に関しては引き続き細心の注意が求められる。

以上